# 慢性疾病等阻害疾病対策事業でアプローチした
# 農場疾病カルテの作成について

豊後大野家畜保健衛生所[1)]　大分家畜保健衛生所[2)]
○磯村 美乃里[1)]　丸山 信明[1)]　（病鑑）菅　正和[1)]　木下 正徳[1)]
病鑑　吉田　史子[2)]　病鑑　武石　秀一[2)]

【はじめに】平成25年5月に管内A農場で豚丹毒が発生した。A農場では過去にPRRS、レンサ球菌症、浮腫病などの感染症に悩まされており、農場衛生プログラムの定期的かつ的確な更新の必要性が浮き彫りとなった。

そこで当家保では管内養豚場に対して慢性疾病等阻害疾病対策事業で巡回する中、総合的・継続的なモニタリング結果及びと畜検査データに基づいた農場疾病カルテ（以下「カルテ」）を作成し、感染症発生予防対策に取り組んだので報告する。

【取り組みの背景】A農場より約100日齢の肉豚の急死が相次ぐとの通報があった。死亡豚1頭を剖検後、定法に従って細菌、ウイルス及び病理組織学的検査を行った結果、豚丹毒と診断した。投薬、豚丹毒不活化ワクチン接種及び飼養衛生管理基準の遵守の徹底を指導する等迅速な対応を行った結果、本病は約1ヶ月で終息した。

A農場はこれまで種々の感染症対策に抗生物質を使用していたことから豚丹毒対策には不活化ワクチンを使用していたが、昨今の飼料費高騰に伴う費用削減のため接種を一時中断し生ワクチンへの変更を検討していた矢先の豚丹毒発生であり、衛生プログラムに課題がみられた。

【取り組み内容】A農場の事例から、迅速な伝染病対策のためには予めカルテを作成しておき、定期的に更新していく必要があると考えられた。さらに、各農場ごとに衛生レベルが異なるため単一な衛生プログラムでは通用しないことから、カルテは各農場ごとに適したものであること、各種感染症の動きを網羅した詳細なものであることが要求される。

そこで、管内養豚場24戸中21戸に対して巡回を行い、各発育ステージ毎にPRRS、オーエスキー病、豚丹毒、豚胸膜肺炎、豚萎縮性鼻炎、トキソプラズマ感染症、日本脳炎、パルボウイルス感染症、サーコウイルス感染症等の抗体検査、豚赤痢、増殖性腸炎、壊死性腸炎等の糞便検査による感染症のモニタリングを定期的に実施するとともに、繁殖成績、事故率及びと畜検査データ等も含めたカルテを作成し、これらを活用した衛生対策の重要性について管内養豚場への啓発活動を行った。さらに飼養衛生管理基準の遵守による農場防疫（バイオセキュリティ）強化についても徹底指導している。

【まとめ】飼養衛生管理基準の遵守の徹底に加え、各農場ごとに定期的なモニタリングに基づくカルテを作成し、衛生指導への活用及び生産者への積極的なデータ還元を行った結果、迅速な疾病コントロールが可能となった。今後は管内養豚場に対するリスク・マネージメントのため引き続きカルテの更新を行っていきたい。